



ストリート・ファニチャー作品名:「この大きな石は何処から転がってきたのだろう? この川の水はどこまで流れていくのだろうか? 僕はこれから何処へ行くのだろうか?」

老け込まないまち

現在は西麻布にお住いの日比野氏。以前は六本木でも暮らしていた、とのことで麻布地区とは馴染みが深いことになる。そんな日比野氏に麻布のイメージを伺うと「主要ターミナルを持たない土地柄でありながら“都心”であり、大人な匂いはするけれども、古臭くもオヤジ臭くもない。絶えず“老け込まない瑞々しい大人が野心を持ってうろつく。”
“老け込まない”という言葉は蓋し麻布(地区)を上手く表現している。
大人びたイメージが強いにも関わらず、新鮮かつ斬新なイメージを持っているのは“老け込まない”からこそ出てくるのだ。

●六本木ヒルズ「けやき坂通り」にあるストリートファニチャーの作品について

—この作品のテーマと麻布(地区)六本木のイメージを教えてください。

日比野さん けやき坂ができるときに、通り沿いに車や人が流れるところを佇んで見守る、僕が子どものころ、ふるさとの岐阜の長良川の河原で石に腰かけて川の流れをずっと見ている、という原風景をイメージして作りました。

実は私も日比野氏の作品に腰かけさせていただいたのだが、座った瞬間に感じたのは、とてつもない「懐かしさ」だった。ここが「六本木」であることを一瞬忘れてしまう。しかも座ったときのおさまりがすごく良い。ず〜っとここに居たい気がした。

—制作にあたって苦労された点がありますか?
日比野さん 質感ですかね。自然な形に見せるための造形にも気を遣いました。

写真では判りにくいかもしれないが、色むらも「自然」を意識してつけたものさそう。

●六本木アートナイトについて

今年で5回目となる開催で、2年連続でアーティストティックディレクターとなる日比野氏。

—今年「麻布(六本木)」というまちをどのように彩ろうとお考えになっていらっしゃいますか?

日比野さん 地域の方々との共同作業による作品をもっと増やしていきたいし、「みんな」で考えて作っていく、という(人の)広がりをもっと大きくしたい。なぜ僕が(ディレクターとして)呼ばれたか?ってその部分だと思えますよ。「みんなで一緒に何かを作る」っていうのは僕の特徴でもあるので。六本木アートナイト自体が1個の作品となるように、当日、イベント会場に来る方はもちろん、こ

の六本木に昔から住んでいるの方々と一緒にまちを彩ろうと考えています。

地元の商店街や、小学校・中学校などにも声をかけて活動をされているとのこと。ご本人曰く「まだまだ、もっとたくさんの人に参加してもらいたい」とおっしゃる。

しかし、私は日比野氏の「みんなで一緒に何かを作る」という下地は着実に根付いてきていると思う。それは前号(26号)の表紙でも取り上げた芋洗坂周辺の「ポップ・アート」を見てもわかる。お店ひとつひとつに「アート」の意識が芽生えているのだ。まちが少しずつ彩を持ち始めている。“老け込まない”どころか“若返っている”のである。

六本木は“アート”の素養が内包されていたのかも知れないが、日比野氏はその息吹を見事に吹き込んでくれている。

—日比野さんにとって“アート”とは?

日比野さん 自分の気持ちを表現し、それが相手に伝わる。表現するだけではアートにならないですよ。たったひとりにでも気持ちが伝わって初めて“アート”が生まれる。伝え方は様々だけれども、例えばお母さんが子どもにお弁当を作って、それを美味しく食べる、「わあ、きれいだね〜!」「おもしろいね〜!」っていうこともお母さんの気持ちが伝わっている訳だから“アート”になるし、言葉でも何でも日常使う表現手段全てに“アート”の要素があると思います。

人と人との「気持ち」のやり取りの中に、常に“アート”は存在し、それを表現する方法は無限なのかも知れない。日比野氏の気さくな人柄がとても良く伝わってきた。

「みんなで一緒に…」日比野氏の“アート”にはとても美しい響きがあった。

六本木アートナイトとは?

生活の中でアートを楽しむという新しいライフスタイルの提案と、大都市東京における街づくりの先駆的なモデル創出を目的として開催する、六本木の街を舞台にしたアートの饗宴。現代アート、デザイン、音楽、映像、パフォーマンス等の多様な作品を街なかになんか点灯させ、非日常的な一夜限りの体験をつくり出す。

アートな麻布に魅せられて 5



日比野克彦(ひびの かつひこ)氏は1958年岐阜市生まれ。東京藝術大学大学院修了。80年代に領域横断的、時代を映す作風で注目される。作品制作の他、身体を媒体に表現し、自己の可能性を追求し続ける。各地域の参加者と共同制作を行い社会で芸術が機能する仕組みを創出する。ぎふ清流国体・ぎふ清流大会総合プロデューサーを務める。日本サッカー協会理事。東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。



《マッチフラッグプロジェクト》
MATCH FLAG (マッチフラッグ)とは1枚の布の上に、試合で対戦する両国のナショナルカラーを用いて作る旗のこと。



《六本木 HIBINO CUP》
サッカーに必要なものを手作りするのがHIBINO CUP。ゴールはダンボールで、ボールはエアーパーキングで作ります。



昨年の「アートナイトの灯台2013」に展示された灯台
日比野氏によるデザイン。六本木ヒルズアリーナに建つ高さ約8mのガラスの透明な「灯台」(写真右側)。

六本木アートナイト2014
2014年4月19日(土)▶20日(日)開催



「箱階段」



江戸時代の趣きをそのまま残している、旧店蔵の入口。
155年の時を経て、この平成の時代に構える姿は、感動ずらおぼえる。



間口約5m、奥行約18mというボリュームで、隣地の空き地(2014年2月現在)からの、古色蒼然とした下見板張りの外観に目を留める人も多いだろう。

麻布びと

未来へ残したい麻布の声

江戸時代からの家を引き継ぎ、後世に語り継ぐために、 住み続けながら、記録としての調査を続けている

南麻布の仙台坂上から、本村保育園、四之橋へと続く1本道。

その一角に、タイムスリップしたかのように、江戸時代を彷彿とさせる蔵付きの古民家が佇む。日々めまぐるしく変化する東京のこの地に残る、貴重な一軒家にお住まいの山岡嘉彌さんに、ご自宅でお話を伺った。

安政年間に建てられた家に住み続けている

山岡嘉彌さんは昭和21年(1946)生まれで、山岡家17代目にあたる。ここで生まれ、今も、趣きのあるどっしりとした、古くて格調高い家に暮らしている。家の歴史を詳しく説明していただいた。

「江戸時代、現在の南麻布3丁目周辺は、仙台藩伊達家の松平陸奥守(伊達政宗)の下屋敷がありました。今なお、仙台坂とよばれる坂も仙台藩に因んだ名称です。先祖は約260年前の宝暦年間(1751~1764)に、近江から江戸へ来たと聞いています。仙台藩の出入り商人として、薬、米、炭や雑貨なども売っていたそうです。今の店蔵が建ったのが、安政2年(1855)の安政大地震のあとの安政6年(1859)です。」

幕末の激動の時代から、この地に立ち続ける家なのである。家屋は道路側が土蔵造りの旧店蔵、その奥が居住棟になっていて、こちらは大正12年(1923)関東大震災の後の昭和8年(1933)に建て替えられ、現在に至っている。当時の設計図が今でも大事に保管されていた。「建築した大工の久保棟梁は、近くの麻布氷川神社の建立時の棟梁でもあります。」江戸時代からの歴史あるパーツの数々が、家のそこかしこに残っている。私たちは山岡さんのお言葉に甘えて、早速家の中、外の探検を開始。

旧店蔵の玄関を入ると座敷(畳の間)になっており、当時の帳場の面影を留めている。天井にはね上げた板の大戸、階段箆(箱階段)、提灯を収めた箱、店舗の看板など、かつて商家であったことを示す建具造作に、私たちの目はくぎづけになった。居住棟も昔ながらの民家のつくりで、庭に面した長い縁側と、その内側に続きの座敷(和室)があり、縦繁格子の猫間障子を通してやわらかな光が室内を包み込む。お話を伺った6畳間のほうには掘り炬燵があり、障子のあかりとりと、縁側のガラス戸越しに庭の景色が眺められ、どこか懐かしい雰囲気だ。小さい頃に行ったおばあちゃんの家、のイメージが広がる佇まいは、心を癒される。

「私は戦後生まれですが、第2次世界大戦の東京大空襲で、麻布周辺も壊滅的な被害を受けました。我が家は奇跡的に空襲を逃れました。残ったこの家に多くの被災者が駆け込み、戦後の私の幼少時も一時は19人が暮らしていました。」庭の大きな井戸も生活用水として、近所に開放していたという。

山岡夫妻、長男の我何人さんに、さらに話を伺う。「結局家族全員、この茶の間に集まりますね。主人は書き物もよくしています。」と、奥様。昔の造りなので、天井は高いが、どこか懐かしく温

我何人さんが、レールを敷いて遊んだ、一直線の縁側は、まるで旅館のよう。



南側は縁側から庭へと広がる。懐かしい昭和の香りが広がる、雰囲気ある縁側。

かな雰囲気的空間が、人を包み込んでくれる、そんな居心地のよい6畳の茶の間であった。

そして、やさしい陽光が降り注ぐ、庭に面して見事な一直線の縁側。今は独立している長男、我何人さんが「小学生の頃は、姉と一緒にレールを組んで、鉄道を走らせて遊んでいました。」と、振り返る。山岡さん父子はそろって、本村小学校の卒業生でもある。「学校から近いこともあって、友だちがよく遊びにきました。庭で木登りしたり、家の内外でかくれんぼしてましたね。」と、懐かしそう。父の嘉彌さんも、同じユズリハの木に登って遊んだ思い出がある、と頷く。沓脱石から降りる庭には、梅や柿など四季折々の樹木や、棟梁の息子が造ったお稲荷さんの社もある。かつては池もあった。

「私の子どもの頃は、家の前の道路が遊び場でした。」と、嘉彌さん。「今は、家の前は明治通りへの抜け道で、一方通行なのに交通量が激しいですが、私が幼少の頃は、2人の弟たちとキャッチボールをしたり、近所の子どもたちと駆け回っていました。」もちろん交通量も少なく、子どもたちにとって、恰好の遊び場でもあった。この家はそうした時代時代の日常を見守ってきた。

私の使命は、この家を記録し、記憶を語り継ぐこと

山岡さんは、現在建築設計事務所の代表として、大使館、マンション、商業施設、一般家屋まで広く設計を手掛け、活躍している。同時に大学院でも教鞭をとっている。仕事の合間をぬって、自宅の外観から造作、建具、家具などの実測を学生たちと共同で実施して、詳細な実測図を描き起こしている。「戦火や地震に耐え抜いた家ですが、今のうちに調査を行い、記録に残しておくことが、自分の務めかなと思っています。」

昭和30年代、自宅周辺は「本村町会・上ノ町商店街」として商店が軒を連ね、八百屋、肉屋、魚屋、そして銭湯まであり、とても賑わっていた。そんな情景を記憶の糸をたぐりながら、小さい頃の家の様子をスケッチで再現したりと、細かい作業を丹念に行っている。

* * * * *

機会があれば、山岡邸にスポットをあてて、この貴重な家屋の様々な表情をレポートさせていただきたい、とお願いしたら快諾して下さった。先進的な再開発ビルや高層ビルが建ち並ぶ都心の真ん中にありながら、かくも古きよき美しい日本の家が、現在まで大切に保存され、住み継がれていることに感動を覚えつつ、山岡家を後にした。



17代目の嘉彌さんと、長男の我何人さん

(取材・文/田中亜紀、田中康寛、高柳由紀子)



山岡嘉彌デザイン事務所代表取締役
東京都立大学大学院客員教授

山岡嘉彌さん



家族が集まるお茶の間の南側は縦繁格子の猫間障子。ほっこり落ち着ける空間だ。



我何人さんが小学生時代、友だちと夢中になって木登りした、ユズリハの木は今も青々と、たくましい姿で庭にそびえる。



昭和8年に改築をした時の設計図が大切に保存されている。



庭には昭和8年に建てられたお稲荷さんがある。



「商標の立て看板」

ワタシも麻布っ子

このコーナーでは、あなたの大切な“家族”を紹介していきます。

はいポーズ。



元麻布のエミーと申します

●エミーさん、自己紹介をお願いします。

私、9歳の女の子。このおうちのご夫婦の娘さんが牛の産業獣医をやっている関係で、千葉の牧場からもらわれて来ました。ちょうどその時、だんなさんのアメリカ人のお知り合いが、テレビ作品のエミー賞を受賞したのでこの名前をつけてもらったの。立派な名前でしょ。

千葉の一軒家はお庭が広くて、昼間は自然の中を駆けまわり、高い木の上から人間を見下ろしています。もちろん夕方には帰ります。本当に楽しみだから、金曜日になると、マンションの玄関先でウロウロしちゃう。ご夫婦は驚いてるけど、お出かけすることはちゃんとわかります。



電気アンカの入った段ボールが寝床です。

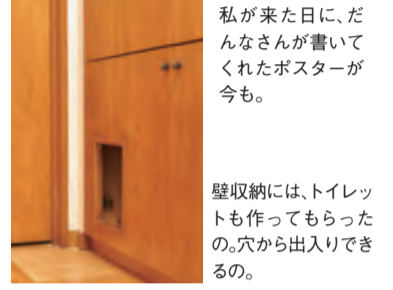
●泰然とした性格ですね。

ご夫婦が旅行の時は、娘さんのところに預けられるけど、そのおうちの人たちとも仲良くできるのよ。私って人と相性がいいのね。神経質じゃなくて物事に動じない性質は、生まれつき。もともと猫は嫌いだけどね。奥さんも「エミーは猫らしくない。人間みたいで、まるで仲間と暮らしているような感じがする」って言ってくれます。



私が来た日に、だんなさんが書いてくれたポスターが今も。

カメラマンさん、いいショット撮れた？奥さんが記念になるから、ってザ・AZABUに応募してくれたの。すぐに取材に来てくれて、今日はありがとう。



壁収納には、トイレも作ってもらったの。穴から出入りできるの。

おひざの上も大好き。



ホンキじゃ、ひっかかないわよ〜。

●姿も堂々としていますね。長いしっぽが素敵。

うれしいわ！奥さんがシマシマでしっぽの長いメスが欲しかったそうで、大勢の兄弟の中から私が選ばれました。運命だったのね。奥さんは「太り過ぎかしら」なんて言ってるけど、キッチンや食卓の上からつまみ食いなんてお行儀の悪いことしないから、ベスト体重よ。それに健康優良児で、生まれてこの方、お医者知らず。

●週末は別荘暮らしとか？

平日はこの元麻布のマンションで静かに過ごしています。ご夫婦は千葉のほうにもおうちがあって、週末はそちらへ車で移動。酔わないかって？ まったく、大丈夫なのよ。



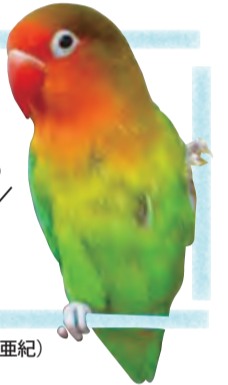
あなたの大好きな動物をご紹介します。

必ず写真を添えて、下記宛てに郵送ください。飼い主の自薦、他薦は問いません。飼い主と一緒に写真も掲載できます。ご応募多数の場合は編集会議に諮りますが、採否の審査過程のお問い合わせには応じかねます。採用させて頂く場合は改めて取材に伺います。お送り頂いた資料は採否に拘わらず返却致しませんので、予めご了承下さい。皆様からのご応募を心よりお待ちしております。

〒106-8515 港区六本木5-16-45

港区麻布地区総合支所 協働推進課 地区政策担当 「ワタシも麻布っ子」応募係

お待ちしております♪



(取材・文/田中亜紀)



東京消防庁麻布消防署で交替制勤務にあたるポンプ隊、はしご隊、救急隊のみなさん

やるしかない！
と
火に向かう

消防士

キュータ^{※1}

子どもに生きていく力を

KIDS!

親子で読んでみよう

ハローワーク

私達六本木中学校2年生の3人は、今回、麻布消防署に取材に行きました。

消防士の主な仕事は、皆さんがご存知の通り、火事になった建物の火を消し、人の命を助けることです。では、人の命を救うために消防士の方々は、日々どんな生活をし、どんなことを心がけているのでしょうか。



ビルの3階に登るポンプ隊の救助訓練

◎消防士になろうと思ったきっかけを教えてください。

小さい頃からの憧れで、人の役に立つ仕事をしたいという強い信念がありました。

◎大切なことは何ですか？

素早さと掛け声です。その為に、日々訓練を重ねています。

◎火の中に飛び込むのは怖くないですか？

安全を確保した上で、「やるしかない！」と思って火に向かいます。仲間もいるので、大丈夫です。

◎苦勞することは何ですか？

私達は3日に1日の24時間勤務^{※2}なので、火災が発生すれば、夜中でも出場しなければなりません。それと、真夏でも重くて暑い装備をすることですね。

◎消防士になって良かったと思うことは何ですか？

救助した方から、お礼の言葉を頂いたときですね。

今回の取材では、実際の訓練を見学したり、インタビューをしたり、とても貴重な体験をさせて頂きました。

読者の皆さんに少しでも消防士の仕事が伝わったらうれしいです。読んで下さって、ありがとうございました。

※1 キュータは東京消防庁のマスコットキャラクターです。

※2 消防士は24時間勤務の三交替制で、当番・非番・週休を繰り返しています。当番の日は3時間仮眠がとれば良い方だそうです。



救急隊員の片山消防副士長(左)、はしご隊員の福田消防士(右)

防火服などの装備は、すぐに着られるよう工夫されている！

消防士になる為の“消防学校”がある！



消防士の装備は合計20キロ！それを45秒で装着する！！



震災訓練では炊き出しの訓練もやる！
～料理男子～



以上、消防士について
のマメ知識
でした。

ひゃあ〜、重っ！



これを着て消火活動するなんて、尊敬しま〜す

(取材・文/工藤真生、前田龍生、山口浩二 取材サポート/出石供子)



パナマ共和国
 面積: 75,517平方キロメートル(北海道よりやや小さい)
 人口: 約340万人(2010年国勢調査)
 首都: パナマシティ
 民族: 混血70%、先住民7%
 言語: スペイン語
 宗教: カトリック
 政体: 立憲共和制
 元首: リカルド・マルティネリ・ベロカル大統領(任期5年、連続再選禁止)
 議会: 一院制(現在71名)、国会議員選挙は大統領選挙と同時に実施(任期5年)

外務省ホームページ
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/panama/data.html>より

パナマ共和国

取材協力/パナマ共和国大使館

ホルヘ・コスマス・シファキ大使

大使を訪ねて 26
麻布の"世界"から

PANAMA

開通100周年を迎えるパナマ運河 中南米の拠点として発展し続ける国

南北アメリカ大陸の交差する中間に位置するパナマは、太平洋と大西洋を結ぶパナマ運河で知られる国だ。また中南米の国際金融センターとして近年成長著しく、日本の企業も多数進出するなど日本との関わりは深い。運河にまつわる日本人の逸話や豊かな自然に恵まれたお国柄、そして大使の日常についてホルヘ・コスマス・シファキ大使にお話を伺った。

世界貿易の一翼を担うパナマと日本の関係

「はじめまして、ようこそいらっしゃいました。」日本語でにこやかに出迎えて下さったホルヘ・コスマス・シファキ大使。大使は首都パナマシティで弁護士としてご活躍中に、民間から抜擢されて2009年より駐日パナマ共和国特命全権大使を務めていらっしゃる。

日本とパナマの外交関係は2004年に100周年を迎え、経済・技術協力で強い関係を維持している。パナマの主要経済は、貿易・運輸・金融を中心としたサービス部門で、日本企業は商社を中心に40社ほどラテンアメリカの活動の拠点として進出。1970年以降、特にパナマ運河のカリブ海側にあるコロン・フリーゾーン(免税地帯)を中南米向け日本製品の輸出拠点としている。現在進行中のインフラ整備はパナマ運河拡張工事から地下鉄建設・国際ハブ空港の拡大計画まで多岐に渡り、日本も技術や資金面などで協力しているという。大使のエネルギーで若々しいお話ぶりから、パナマの近年の経済発展の様子がより一層強く感じられた。

大使ご自身の日本との出会いについてお尋ねすると、日本に赴任して戸惑われたことは、日本人とパナマ人の気持ちの表現の違いだったという。「ラテン系のパナマ人は、顔や声のトーンや手振りでも直接気持ちを表現しますが、日本では正反対で間接的なものの言い方をするので驚きました。

でも日本の人たちと接することで違いを理解できるようになりました。」と、今では業務に役立てているという。

パナマは主に先住民やヨーロッパ系白人、アフリカ系黒人、アジア系から構成される多民族国家。「パナマにはさまざまな民族の人たちが暮らしています。」国名の「パナマ」は先住民の言葉「魚・蝶々があふれる地」に由来し、世界遺産認定のダリエン国立公園など、熱帯動植物の宝庫として彩り溢れる自然に満ちている。

「私のおすすめは美しいビーチで有名なサンブラス諸島。」クルージングや遺跡巡り、ショッピングやカジノも楽しみ、欧米からは航空便によるアクセスの利便性もあいまって、定年退職者の移住地として人気が高いという。パナマの魅力日本人にも知ってもらいたいと、「目下パナマへの16時間の直行便計画(現在はアメリカ経由20時間)を進めて、日本人向け観光に力を入れています。大使館では学校訪問も積極的に受け入れているんですよ。」

パナマ運河建設に従事した青山士氏

2014年はパナマ運河開通100周年という記念すべき年。日本はアメリカ・中国・チリについて、世界第4位のパナマ運河利用国。パナマ運河は全長80kmで、太平洋と大西洋を結ぶ海上交通の要衝として建造されたが、建設に従事した日本人がいたと大使に教えられた。唯一の日本人技術者の青山士氏(1878年~1963年)は、1904年~1911年のパナマ運河建設参加の経験を活かして、後に荒川放水路建設工事に従事。戦前の日本の洪水対策と産業振興に貢献したという。大使は「静岡在住のご息子と大使館でお目にかかる機会があり、大変感動を覚えました。」と語られた。

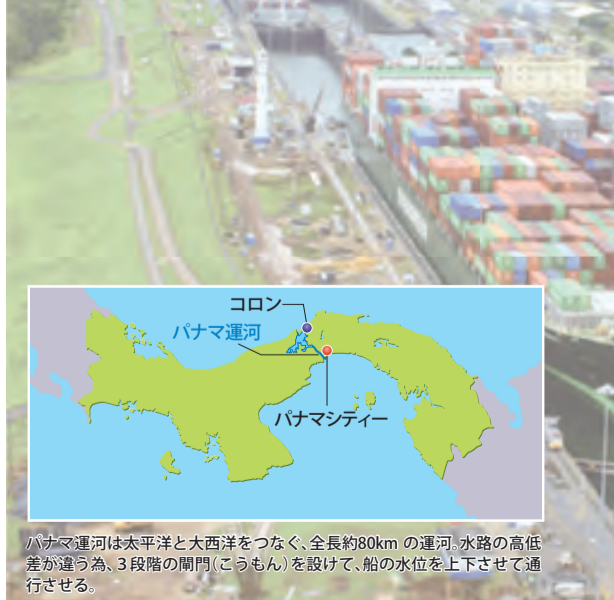
休日にご家族と都内散策を楽しむ

赴任2年目に夫人がご長男を東京で出産されたことから、「日本は故郷のひとつになりました」。休日にはご家族で近隣の散策を楽しみ、六本木ヒルズのような先端的な高層ビルと古い日本家屋が共存している様子に興味深いと言う。日本の食事に関しては「問題ありません。特に『しゃぶしゃぶ』や『とんかつ』、『寿司』は大好きです。パナマの主食はお米なので、米を主食とする日本へは親近感を感じま



▲大使館内に飾られるパナマの国章。上方の星は9つの県を表し、国鳥であるハービーイーグル(鷹)は独立の象徴で、くちばしにくわえるリボンには「世界の利益のために」と書かれている。中央の二つの海は太平洋と大西洋に挟まれたパナマ海峡とパナマ運河を象徴し、国の発展への願いが込められている。

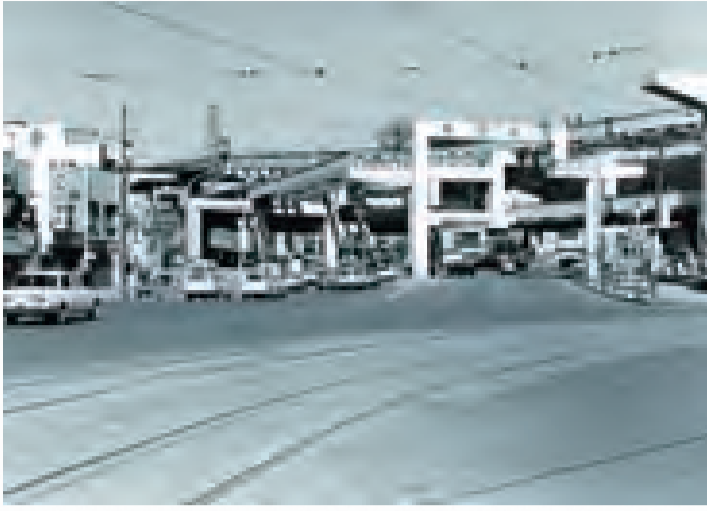
- 1 首都パナマシティは高層ビルが建ち並ぶ国際色豊かな街。
- 2 コロン・フリーゾーンはカリブ海側にあるコロン市にある自由貿易地帯。
- 3 ダリエン国立公園には、広大な熱帯雨林の原生林があり300種類以上の鳥類が生息している。
- 4 パナマはアメリカを起点としたパナマ運河を経由するクルージングの主要な寄港地。
- 5 サンブラス諸島はカリブ海側に浮かぶ大小350以上の島々からなる。
- 6 パナマの伝統的なチキンスープ「サンコチョ」。ニャメという山芋が入り、コリアンダーなどのハーブで味付けし、ご飯と一緒に食べる。
- 7 パナマの先住民クナ族の女性達による手工芸品のモロ。色とりどりの布地を組み合わせてアップリケを施している。
- 8 お祭りやお祝い事で民族舞踊を踊る際に使用される女性用民族衣装「ボジェラ」。



パナマ運河は太平洋と大西洋をつなぐ、全長約80kmの運河。水路の高低差が違う為、3段階の閘門(こうもん)を設けて、船の水位を上下させて通行させる。

す。」大使の好物のパナマの郷土料理「サンコチョ」というチキンスープも、ごはんとともに食される。

パナマ経済からご家族のお話まで、にこやかに話して下さった大使。パナマの地政学上の地の利を活かした、未来へ向けたエネルギーな国の姿勢が伺われて、パナマのことを一層知りたくなった。1999年にはパナマ史上初の女性大統領も誕生し、現政権にも女性閣僚が活躍中、経済や観光の分野とともに目がはなせない国である。



昭和42年(1967年) 一の橋交差点付近から、新一の橋方面を望む。建設中の首都高速道路「一の橋ジャンクション」。
写真撮影:田口政典氏 写真提供:田口重久氏

一の橋



平成24年(2012年) 新一の橋交差点付近

「麻布未来写真館」とは

港区麻布地区総合支所では、平成21年度から区民や企業等と協働し、麻布地区の昔の写真などを収集するとともに、定点写真を撮影し、麻布のまちの変化を保存する取組として「麻布未来写真館」事業を運営しています。当事業は、麻布地区の資料収集・保存を通じて、住民の方々にとって身近な歴史・文化資源を保全・継承するとともに、より一層の活用を目的としています。同時に、「まち」の歴史や文化をより多くの方々を知っていただき、まちへの愛着を深めていただく一助となることを目指しています。

麻布未来写真館

「名前由来は「麻布御殿」

なぜ「一の橋」、「二之橋」という名前なのか、みなさんはご存知でしたか？
五代將軍徳川綱吉の保養施設として「麻布(白金御殿)を竣工するにあたり、古川の拡張工事をする事になり、最初に橋を架けた場所が「一の橋」。工事に従事する職人は一番組から十番組まで分けて周辺に住まわせました。
十番組が居住していた場所が「麻布十番」です。
※現在の四之橋一帯



平成24年(2012年) 二の橋交差点付近

二之橋



昭和42年(1967年) 二の橋交差点より、麻布十番方面を望む。
写真撮影:田口政典氏 写真提供:田口重久氏

「麻布未来写真館」からのお知らせ

■古い写真を探しています

未来に向けて、残し、伝えていくべきとお感じになる「麻布地区の古い写真」がありましたら、港区麻布地区総合支所までお寄せください。詳細は「協働推進課地区政策担当」までお問合せください。
お問合せ 電話:03-5114-8812

■第3期パネル展を開催

平成26年3月18日(火)~3月28日(金)
9:00~17:00 (土日休み)
会場:港区役所1階ロビー
※第3期パネル展では、第2期で展示したパネルを集約して展示します。

(取材・文/田中康寛)

地域社会のゆくえ

14

地域の安全・安心を見守る「目」 六本木安全安心パトロール隊に学ぶ地域活動

麻布地域は治安はいいほうではないかと思いますが、繁華街を中心に子ども一人で歩くのにはちょっと心配なエリアもあります。地域の安全・安心をどのように守り、育てていけばいいのか、10年にわたり継続してボランティアで地域活動をしている「六本木安全安心パトロール隊」隊長の新保雅敏さんにお話を伺いました。

活動を始めたきっかけ

2004年頃、六本木の街では殺傷事件等が発生したり傷害事件も多く、治安が悪い状況でした。泥酔客が徘徊し子どもたちの通学時間まで大騒ぎしたり、歩道上にははみ出し看板や違法駐輪、違法ゴミにカラスがたかって子どもはもちろん

通行人の安全が著しく脅かされました。そこで「六本木安全安心パトロール隊」が結成されました。商店会や町会の有志50人でスタートして、現在は六本木にオフィスをかまえる企業の社員の方も参加するようになり100人ほどが登録しています。

どんな活動をしているのでしょうか

六本木の交差点を中心に、隔週金曜日に朝のパトロールとしてゴミ拾いや通学の見守りを、毎週水曜日か木曜日には住宅街も含め夜のパトロールを実施しています。

街の環境浄化、歩行者空間の改善、夜の治安維持が活動の柱です。パトロール活動は昨年12月には通算500回を超えました。活動の効果で減ってきてはいますが、以前は70ℓのゴミ袋で10袋ほどのゴミが集まりました。

みんなで力を合わせれば

「子どもの目線で問題がないか考えると、ご高齢の方にも女性にも優しい町づくりができます。みんなで力を合わせればきっとなんとかできるはずです」新保さんから力強いメッセージをいただきました。

防犯には「あいさつ」が効果的！

東京都青少年・治安対策本部安全・安心まちづくり担当課長の彦田さんによると、泥棒は人の目

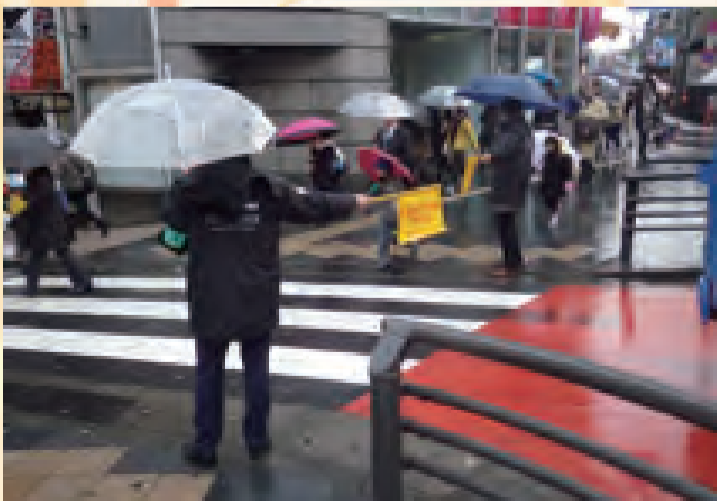
六本木安全安心パトロール隊 隊長新保雅敏さん。ユニフォームが決まっています！



が一番苦手なので、ご近所であいさつをするのが一番効果的だそうです。声に出すのが恥ずかしければ会釈でもいいですね。日常生活の中でできることから始めてみるのはいかがでしょうか。

「歌舞伎の目ステッカー」知ってますか？

バスや宅配便の車両に貼られている歌舞伎役者の隈取の目のステッカーを見たことはありませんか？こちらは東京都の施策で「動く防犯の眼」といって、民間の事業者に目配りや通報など防犯活動の意識を向上してもらうことを目的として実施しているものです。これもまた地域の安全・安心を見守る目、ですね。



雨の日も休むことなく見守り活動ごろうさます。

※六本木安全安心パトロール隊 HP: <http://www.ractive-roppongi.com/patrol/index.shtml> ※動く防犯の眼 HP: <http://www.bouhan.metro.tokyo.jp>

(取材・文/満木葉子)



高風居の外観。

昨年の秋のとある日、取材スタッフは麻布をはなれ三鷹市へと向かった。

目的地は、国際基督教大学(ICU)の構内にある茶室「高風居」。

歴史ある6つの建造物からなる“泰山荘”の中の一棟で、その中心的な存在として知られている。

この高風居は、類まれなる変遷の歴史をもつ。最初は明治時代に建てられた書斎で、のちに茶室に変化、所有者が次々と交代し場所も3回移転。そしてその存続には、大正時代まで麻布に在った紀州徳川家が深く関与していた…。今回、国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館の協力のもと、高風居の内外を撮影させていただき貴重な機会を得ることができた。徳川家との関わりを中心に、その数奇な運命をひもといていこう。

華麗なる流転を遂げた茶室

高風居

徳川家の南葵文庫に寄贈された小さな書斎

現在の麻布台一丁目、港区立麻布小学校、外務省飯倉公館、麻布郵便局などのある一帯には、明治から大正期にかけて紀州徳川家の屋敷が存在した。15代当主徳川頼倫(1872~1925)は、邸内の一角に南葵文庫を開設。美しい西洋建築の、日本初の私設図書館である。(VOL.17『麻布の軌跡 南葵文庫』に掲載。http://www.city.minato.tokyo.jp/azabu/index.html)

そして文庫の裏庭には、小さな和風建築の書斎が建てられており“一畳敷”と呼ばれていた。実はこの一畳敷こそが、やがて、今回のテーマである茶室「高風居」の中核となる建物なのだ。松浦武四郎が建造し、武四郎の没後、徳川家へ譲り渡された経緯をもつ。

松浦武四郎の“一畳敷”とは

では松浦武四郎(1818~1888)とは、いかなる御仁か。幕末から明治にかけての生涯の大半を旅の中で過ごし、旅行記や歴史書、地図など多くの著作を刊行した。とくに北方に強い関心を持ち、アイヌの人々とも深く交流。幕府の蝦夷御用雇ともなるが、松前藩のアイヌへの対応に異を申し立て、その職を退くほどの一徹だった。

また考古遺物のコレクターでもあり、晩年には全国の知己から寄贈された神社仏閣や歴史的建造物の古材89点を寄せ集めて、明治19(1886)年、神田五軒町の自宅に書斎としての一畳敷を増築。大層気に入って、ここで寝起きし、来客のもてなしなども行っていたという。

武四郎は、自分の亡骸は一畳敷とともに火葬してほしいと遺言したが、遺族は思い出として大切に保存した。そして明治41(1908)年、徳川家からの申し入れにより麻布、南葵文庫内への移転が行われる。後に起きた関東大震災で松浦家の家屋は焼失したというから、一畳敷はいわば命拾いをしたわけだ。

徳川頼倫の発案で「高風居」完成

このようにして、徳川家の所有物となった一畳敷。南葵文庫とともに世間の脚光を浴びることとなる。いったんここで、徳川頼倫の人物像に触れておこう。文武にひいで真情にあふれ、かつ進取の気性に富んだ人で、若き日にはイギリス、ケンブリッジ大学に遊学し欧米諸国を視察。生涯を通じて多くの文化活動を行い、南葵文庫の設立以外にも、日本全国の史蹟名勝の保存に力を入れるなどした。

そんな頼倫が、先人、武四郎の人柄に魅かれ実績を評価したのは想像に難くない。さらには一畳敷を差し掛ける母屋として、武四郎と同じく歴史的建造物の古材を使った茶室を建てようと計画する。この建物こそが「高風居」である。高尚な人の住むところ、という意味で武四郎への尊敬の念をもって命名したという。

大正12(1923)年の関東大震災の半年前、徳川家は麻布から代々木上原へと転居。震災の翌年頃に一畳敷も移築されたが、高風居の建設の志半ば、頼倫は急逝する。その後、夫人や側近らによって高風居は完成。つまり一畳敷は2回の移転を経て、書斎から書斎をあわせもつ茶室へと変貌を遂げ、新たな命が吹き込まれたのである。

●徳川頼倫



●徳川家の屋敷跡



飯倉片町の港区立麻布小学校の前にあるプレート。近代文化の拠点—旧紀州徳川家屋敷跡と表題にあり、南葵文庫などのことが記載されている。

(出典:『泰山荘』ヘンリー・スミス著 編集・発行:国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館)

三鷹へ再移転。“泰山荘”に吸収される

しかし、ここも終の場所にはならなかった。徳川家が高風居を手放したのは経済的な事情もあったというが、次なる所有者、山田敬亮(1881~1944)によって昭和11(1936)年、3度目の移転をする。敬亮は旧日産財閥の子会社の役員で、大変裕福だった。そして茶会を開ける別荘“泰山荘”を三鷹に計画。母屋(高風居とは別。後に焼失)、待合、書院、蔵、車庫、表門などに加え、高風居を入手する。由緒ある建物を移築することは茶の湯の世界では珍しいことではなく、とりわけ高風居は徳川家所有という箔の付いたもの。それゆえに所望され、大切に引き継がれていったのであろう。

そののち時代の流れとともに、泰山荘の持ち主は交代し、昭和15(1940)年、中島飛行機会社の中島知久平(1884~1949)の手にわたり、昭和25(1950)年、国際基督教大学の創立の翌年に正式に大学側へと譲渡された。

筆者が高風居の存在を知ったのは3年前、VOL.17の制作の折に南葵文庫について調べている時のことである。以後資料や情報を集め、昨年11月、ついに高風居と対面する日を迎えた。現地でも案内をして下さったのは、泰山荘の研究や、保存・維持活動を行う“泰山荘プロジェクト”の学生さんたちだ。

泰山荘の門をくぐると芝生におおわれた庭が広がり、建物が点在。そして傾斜した林の中に、厚い茅葺屋根をもつ高風居があらわれた。古色蒼然としながらも、われわれの目には、秋のやわらかな日差しを浴びて輝くような姿に見えた。内部は、土間から続く廊下の左手に一畳敷があり、その先のかねおりの廊下の左右に6畳の茶室と3畳の水屋がふり分けられている。竣工当時は新旧の部分の違いが際立っていたのだろうが、歳月を経た今は、全体にしっかりと調和し落ち着いた佇まいをみせる。

畳に座ってみれば、“頼倫も武四郎もあちらの世で、建物が流転していくのをどんな思いで見守っていたのかしら?”とか、“もしも頼倫と武四郎がここで対面したなら、今を生きていれば当代きっての文化人どうし、さぞ絶妙なトークが繰り広げられたのでは”など、空想は限りなく広がる。ひたすらに感無量であった。

平成11(1999)年、現存する泰山荘の6つの建物が国の登録有形文化財となる。そして年に一度、大学の学園祭の2日間のみ一般公開される。興味をもたれた方は、ぜひ一度訪れてみてはいかがだろうか。

●泰山荘プロジェクトの皆さん



左からリーダーの工藤哲郎さん(4年)、尾形杏さん(1年)、下休場美保さん(3年)、上西美穂里さん(3年) 泰山荘ではふだん、博物館学の授業や茶道部による稽古などが行われている。2003年に「泰山荘プロジェクト」が発足、学生さんが清掃・公開活動に協力。 2011年度から2015年度まで献学60周年記念事業募金を展開。泰山荘改修支援資金も募っている。(問い合わせ先 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 ☎0422-33-3340)



●泰山荘の門



●高風居【茶室】



【一畳敷】



取材協力/国際基督教大学 湯浅八郎記念館 参考文献/『泰山荘』ヘンリー・スミス著 編集・発行:国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館
館長代理・学芸員 原礼子さん
学芸員 福野明子さん
泰山荘プロジェクトの学生さん
「南葵文庫 目学問・耳学問」坪田茉莉子著 編集・製作責任者:郁朋社 発行:(社)東京都教職員互助会
「静嘉堂蔵 松浦武四郎コレクション」 編集・発行:公益財団法人 静嘉堂
「幕末の探検家松浦武四郎と一畳敷」 発行:INAX出版
「泰山荘の記」 紀州家 高木文誌
「木片勸進」 松浦武四郎 (国会図書館蔵)

(取材/大澤佳枝、田中亜紀、森 明 文/田中亜紀)

区民交通傷害保険のお知らせ

平成26年度 港区民交通傷害保険加入の申込は 3月31日(月)【金融機関での申込は3月24日(月)】までです

港区民交通傷害保険は、少額の保険料で加入でき、交通事故でケガをしたときに、入院や通院治療日数と通院治療期間に応じて保険金をお支払いする保険制度です。港区民交通傷害保険に、「自転車賠償責任プラン」を併せたコースも募集しています。自転車を運転中に相手にケガをさせてしまった場合等が対象です。※自転車賠償責任プランのみでの加入はできません。

詳しくは各総合支所で配布しているパンフレット又は区のホームページをご覧ください。

加入対象者 平成26年4月1日午前0時時点で港区に住所がある人

保険期間 平成26年4月1日午前0時から平成27年3月31日午後12時までの1年間

加入方法

●個人で加入される場合

各総合支所協働推進課協働推進係又は区内金融機関(銀行、信用金庫、信用組合、ゆうちょ銀行・郵便局)で配布する加入申込書に記入の上、保険料を添えてお申し込みください。

●10人以上の団体で加入される場合

各総合支所協働推進課協働推進係で、団体加入申込書に記入のうえ、人数分の保険料を添えてお申し込みください。

加入申込期限

- 各総合支所協働推進課協働推進係 3月31日(月)
 - 区内金融機関 3月24日(月)
- ※申込期間外の加入はできませんのでご注意ください。

引受保険会社

(株)損害保険ジャパン東京公務開発部営業開発課
千代田区霞が関3-7-3
電話/03-3593-6506

お問合せ/麻布地区総合支所協働推進課協働推進係
電話/03-5114-8802

(SJ13-11422 平成26年1月28日作成)

麻布警察署からのお知らせ

「犯罪被害に遭わないように！」 犯罪被害に遭わないためには、日頃の心がけが大切です

◆母さん助けて詐欺・還付金詐欺の被害防止

息子さんやお孫さんから「携帯電話の番号が変わった。」「鞆を電車内で紛失した。」「会社のお金を使い込んだ。」等と電話があった場合。

区役所や社会保険庁等から「医療費の還付がある。」「税金に過払いがあるので還付手続きをします。」等と電話があった場合。

これらの電話があった場合は、すぐに信用をしないで、一旦電話を切って必ず元々知っている家族の電話番号や、官公庁の場合は電話帳等に掲載している電話番号に確認の電話をしましょう。

◆ひったくり被害防止 「ひったくり3つの用心」を心がけましょう

- ①鞆は建物側に持つ(出来れば斜めがけにする)
- ②バイクや自転車が後方から近づいてきたら振り返る(スマートフォン等を使用しながら歩く際は特に注意)
- ③自転車のカゴには、ひったくり防止カバーや防止ネットを取り付ける

麻布警察署 犯罪防止対策事務局 電話/03-3479-0110 内線6502・2612

港都税事務所からのお知らせ

平成26年度定期課税分自動車税の 障害者減免申請の受付を行っています

身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳等をお持ちの方で、一定の要件を満たす場合、自動車税・自動車取得税の減免を受けられる制度があります。現在、新たに身体障害者手帳等を取得された方、減免申請がお済みでない方を対象として、平成26年6月2日(月)まで、平成26年度分の減免申請の受付を行っています。詳しくは、下記までお問い合わせください。

4月、5月は窓口が混み合います。お早めの申請をお願いします。

<ご注意>

- ・自動車を新たに取得した場合の申請期間は、登録の日から1ヶ月以内です。申請期限を過ぎますと、減免は受けられません。
- ・減免額には上限が設定されています。

お問合せ/東京都自動車税コールセンター
電話/03-3525-4066

平日午前9時～午後5時まで
(土日・祝日を除く)



麻布消防署からのお知らせ

私たちと一緒に活動しませんか？ 麻布消防少年団が団員募集中！

麻布消防少年団は小学1年生から中学3年生まで34名が楽しく活動しています。互いに助け合う、規律正しい行動をするなどを基本に、ロープワーク、救急訓練、消火訓練、救助訓練などを行っています。今年度は「栃木県での防災キャンプ」や「消防出初式見学」などの楽しい活動も行いました。

活動は月に1回程度日曜日に麻布消防署で行っています。入団を希望される方は麻布消防署までお問い合わせ下さい。



担当/麻布消防署警防課 長谷川
電話/03-3470-0119

東麻布商店会からのお知らせ

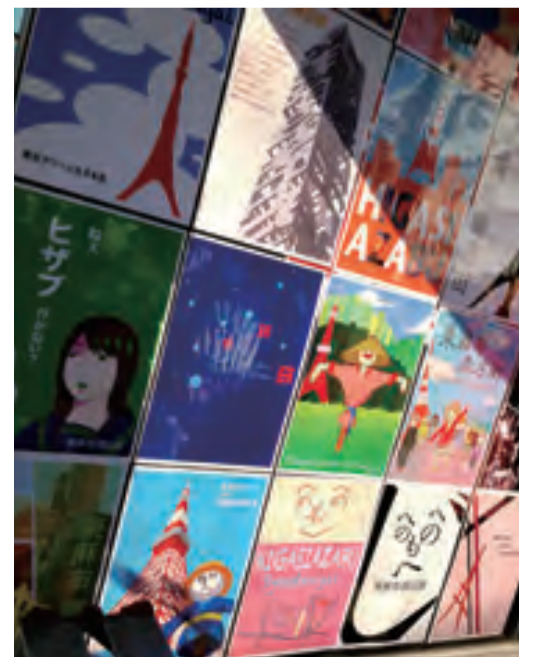
東麻布商店会×東京都立総合芸術高等学校 ポスタープロジェクト

東京都立総合芸術高等学校の美術科講師からの「学生と社会がつながる機会を増やしたい」という声きっかけでスタートしたプロジェクト

東麻布を拠点に活動する広告制作会社のサポートを受けて、授業の一環として学生21名がポスターの制作と、商店会への活性化のアイデアが集まりました。

ポスターは12月に商店会が実施した福引き会にて投票を行いました。総計300近い投票の中から1位に輝いたのは渡辺絹花さんの作品でした。選ばれた勝因は「かかしと東京タワーのイラストが細部も丁寧に描かれてわかりやすく、みなさんに伝わったのでは」と美術科の加藤先生。

「学生もいつもよりイキイキと、とても意義のあるすばらしい授業となった」という学校の評価を受け、ポスタープロジェクトが終了しました。



港区麻布地区総合支所だより



～広めよう“まちのルール”～「六本木安全安心憲章」

平成25年7月に、六本木地区安全安心まちづくり推進会議(以下、推進会議)において「六本木安全安心憲章」(以下、憲章)が制定されました。この憲章は六本木のまちで全ての人を守るべきまちのルールを示したもので、これまで周知・浸透を図っていくためにさまざまな活動を実施してきました。

六本木地区安全安心まちづくり推進会議はこんな活動をしています

●六本木安全安心パレードを開催

平成25年7月23日、推進会議主催によるパレードを行いました。

地元町会・自治会、商店会、事業者、行政等が六本木地区の安全安心のために活動していることの周知と、広く賛同を促していくために開催しました。あわせて、パレード前に開催された推進会議において憲章が制定されたこともPRしました。



●「六本木安全安心憲章」のシンボルマークを制作

憲章を守り、広くPRするためのシンボルマークを制作しています。

制作にあたっては、平成26年2月末までデザインを募集し94点の応募がありました。応募作品の中から選定を行い、3月に採用デザインを決定する予定です。決定したシンボルマークは憲章の広報活動等に活用していく予定です。

●「六本木安全安心憲章」に関する認証制度を創設

平成26年4月から店舗・事業所(以下「事業所等」)を対象に、憲章の趣旨を理解し、賛同していただける事業所等の募集を予定しています。

賛同いただいた事業所等や、その内、特に活動が顕著であるとして認証した事業所等は、区のホームページ等により紹介していく予定です。

●「六本木安全安心憲章」の周知

六本木交差点の大型街頭ビジョンやちいばす車内でのPR映像の放映、看板等の設置、推進会議委員等による周知キャンペーンを実施してきました。

また、本紙や広報みなど等への掲載、ポスターの掲出を行いました。



「六本木安全安心憲章」制定の経緯

安全で安心して暮らせるまちにすることを目的し「六本木地区安全安心まちづくり推進会議」を平成18年に設置しました。港区長を会長に、町会・自治会、商店会、事業者、関係団体・機関が連携・協働し、まちの課題解決に向けた検討を続けてきました。

検討を重ねた結果、六本木地区において、安全安心の取組を地域ぐるみで推進するためには、まちに明確な理念・独自ルールを制定し、明示することが有効であるとの結論に達し、平成25年7月23日に、推進会議において「六本木安全安心憲章」をまちのルールとして制定しました。



●六本木安全安心憲章の内容は、区のホームページからご参照いただけるほか、麻布地区総合支所協働推進課窓口でも憲章の全文を配布しています。



皆様のご理解とご協力をお願いします

以上の活動のほかにも、この憲章を広く周知し、六本木地区にかかわりのある多くの人々や団体の皆さんにも関心を持っていただけるよう、さまざまな活動を実施します。

六本木安全安心憲章の趣旨をご理解いただき、六本木の安全安心なまちづくりにご協力をお願いします。

お問合せ/麻布地区総合支所協働推進課協働推進係 電話/03-5114-8802

麻布地区総合支所に食堂がオープン

麻布地区総合支所2階に、カフェ&プチ売店「J's CAFE&SHOP麻布店」がオープンしました。

「J's CAFE&SHOP麻布店」では、管理栄養士が作成した健康メニューを日替りランチとして毎日提供しております。カロリーを700～800kcalに抑え、塩分を3g程度としたヘルシーなプレートメニューとなっております。店内もゆったりとした雰囲気です。また、プチ売店も併設しており、ちょっとしたお買い物もお楽しみいただけます。ぜひ一度ご来店ください。



営業時間/ 10:00 ~ 16:00
(ランチ 11:30 ~ 14:00)
電話/03-3586-0545

麻布地区の落書き消去活動を支援します!

落書きを放置することは、地域の監視の目が行き届かない無関心な場所であることを示すこととなり、犯罪を誘発します。麻布地区総合支所では、地域の防犯力を向上させ、明るいまちをつくるための落書き消去活動を行う地域コミュニティに対し、必要な物品の支援を行っています。



平成25年度「麻布の絆賞」：アザ輪ちゃん

対象 麻布地区において落書き消去活動を実施しようとする町会・自治会、商店会、環境美化活動を行う団体等

物品の支援 消去剤、スクレーパー、ウエス、軍手等を提供または貸与します。※窓口でご相談ください。

申請方法 申請書に記入の上、窓口へ。※申請書は窓口または港区ホームページ<http://www.city.minato.tokyo.jp/azabu>で入手してご使用ください。

注意事項 落書きのある建物等の所有者又は管理者から落書き消去について必ず承諾を得てください。

申請窓口・お問合せ/麻布地区総合支所協働推進課協働推進係
電話/03-5114-8802 FAX/03-3583-3782

ザ・AZABUへのご意見・ご要望をお寄せください



ご住所・氏名・職業(学校名)・電話番号・ご意見・ご要望(日本語又は英語、字数・様式自由)を書いて、直接又は郵送・ファックスで、〒106-8515 港区六本木5-16-45 麻布地区総合支所 協働推進課へ。

●電話/03-5114-8802 ●FAX/03-3583-3782

編集委員を募集しています

編集後記

美しく連なる、腰掛にもなりそうな白い作品。けやき坂のどの辺に? 隣の人の説明でやっと分かる。そして、皆さんのお蔭でやってこられたのだと、感謝。執筆者の説明・他の委員の質問などと、会議が続く。ひたむきな取組で社会貢献していらっしゃる方々、今は他の区で大切にされている文化財などについてお伝えできることを楽しみに、家路を急いだ。

(折戸桂子)

地域情報紙

「ザ・AZABU」はホームページからご覧になれます。

「ザ・AZABU」は英語版も発行しています。



ザ・AZABU

●配布設置場所のご案内
六本木1丁目、六本木、広尾、麻布十番の各地下鉄の駅、ちいばす車内、みなと図書館、麻布図書サービスセンター、南麻布・本村・麻布・西麻布・飯倉の各いきいきプラザ、麻布区民センター、麻布地区総合支所等

●本紙掲載の記事・写真・イラストの無断転載を禁じます。

Chief 田中亜紀
Sub Chief 高柳由紀子
Staff 出石供子 永浜和美
大澤佳枝 中山 恵
大村久美子 瀧木葉子
尾崎恭彦 森 明
折戸桂子 森井友紀
田中康寛 山下良蔵
Junior Staff 工藤真生 山口浩二
前田龍生

「みなとコール」は暮らしの疑問にまとめてお答えします!

区役所のサービスや施設案内、催し情報など、お気軽に問合せください。年中無休/午前7:00～午後11:00 ※英語での対応もいたします。

電話/03-5472-3710 FAX/03-5777-8752
Eメール/info@minato.call-center.jp

“Minato Call” information service
Minato call is a new city information service, available in English every day from 7 a.m. - 11 p.m.
Minato Call: Tel: 03-5472-3710; Fax: 03-5777-8752; E-mail: info@minato.call-center.jp